

## 平成23年6月の解説（週間天気予報）

### 【6月の天候状況】

上旬から中旬にかけては、梅雨前線が九州から本州の南岸に停滞しました。また、月の前半は太平洋高気圧が平年より西に強く張り出し、沖縄地方では晴れの日が多くなって、沖縄地方では梅雨の統計を開始した1951年以降、最も早い9日ごろに梅雨明けしました（速報値）。一方、南から暖かく湿った気流が流れ込んだ九州では中旬は大雨の日が続きました。下旬には太平洋高気圧は本州の南で強まり、梅雨前線は日本海から北陸地方、東北地方まで北上して停滞しました。東北地方から北陸地方の所々で大雨となったほか、下旬中頃には台風第5号が先島諸島から東シナ海を北上した影響により西日本太平洋側でも所々で大雨となり、その後も北日本では梅雨前線の影響を受けました。また、東日本より西の地方では暖かく湿った気流の影響を受けて雲が広がりやすくなりましたが、東・西日本の太平洋側では晴れて所々で猛暑となりました。なお、奄美地方は22日ごろ、九州南部地方は28日ごろ梅雨明けしました（いずれも速報値）。

月平均気温は、ほぼ月を通して気温が平年を上回った沖縄・奄美ではかなり高くなりました。また、月のはじめや中旬に気温が平年を下回る時期があった北日本から西日本でも月平均気温は高くなりました。月降水量は、梅雨前線や暖かく湿った気流の影響により、北日本日本海側でかなり多く、西日本でも多くなりました。月間日照時間は、平年に比べて曇りや雨の日が多かった西日本ではかなり少なく、北日本日本海側と東日本太平洋側では少なくなりました。

### 【6月の検証結果】

「降水の有無」の適中率（3～7日目の平均）は、全国平均では例年値<sup>(注)</sup>より2ポイント低い61%でした。地方毎の適中率では沖縄地方で11ポイント高くなりましたが、近畿地方と中国地方で13ポイント、東海地方と九州北部地方で6～7ポイント低くなりました。

最高気温（2～7日目の平均）の予報誤差は、北日本など例年値より小さい地方もありましたが、東海地方で0.8℃、四国地方で0.6℃大きくなり、全国平均では0.1℃大きい2.8℃になりました。最低気温（2～7日目の平均）の予報誤差は、ほぼ全国的に例年値より小さくなり、全国平均では0.2℃小さい1.6℃になりました。

<sup>(注)</sup> 例年値は気象庁HP（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

### 【8月の週間天気予報の利用にあたって】

8月は年間を通して最も気温が高く、真夏日（日最高気温が30℃以上の日）が最も多い月です。これは、梅雨が明けて太平洋高気圧に覆われて晴れる日が多くなるためです。このような日には、地上の気温は日中にかけて上昇し、30℃を超え場合によっては35℃を超えて猛暑日となる所もあります。また、気温の上昇により大気の状態が不安定となって積乱雲が発達し、午後は所々で、にわか雨や雷雨となることがあります。

夏の週間天気予報の利用では、猛暑日が数日間続くと予想されるような場合には、高温に関する気象情報が発表されますので、向こう一週間の日々の最高気温予報や高温注意情報も参照し、熱中症など健康管理に留意して下さい。また、晴れの予報が発表されていても降水確率が30～40%と高い日には、にわか雨や雷雨の発生する所もありますので、海や山でのレジャーにおける計画の参考にして下さい。